

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 28 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：24720193

研究課題名(和文) 相互行為の言語人類学的分析：石垣島の言語・ジェスチャー・環境の交差より

研究課題名(英文) A linguistic anthropological analysis of interaction: The intersection between language, gesture, and lived space on Ishigaki Island

研究代表者

武黒 麻紀子 (Takekuro, Makiko)

早稲田大学・法学大学院・准教授

研究者番号：80434223

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：多様な背景を持つ人々を受け入れてきた歴史から『合衆国』とも呼ばれる石垣島で、島出身者と移住者の間の相互行為を分析した。友好的な関係に見える島民と移住者にも隔たりがないとは言えず、島出身者とそれ以外の者、沖縄県出身者と他県からの移住者、移住者間でも、島生活の長さ、ネイティブ度、島全般の知識、専門技能の有無に応じて力関係があることが分かった。『合衆国』の構成員は、相互行為の「今・ここ」で瞬時に変化する力関係や嫉妬、羨望といった感情に対処しながら友好的な関係を構築しようとしていることを国内外の学会で発表した。

研究成果の概要(英文)：Ishigaki Island is often described as gasshuukoku (‘united states’), which is a term associated with a community of coexistence. Despite the image, a contrast and separation are persistent especially between islanders and recent settlers. For example, in their speech, there is a constant use of “we” versus “they.” This reinforces superficial stereotypes. Even among settlers, a hierarchy emerges when it comes to the knowledge of the local culture as well as the length of stay. However, the analysis of actual interactions among natives and between natives and settlers reveals that members of the community often try to overcome stereotypes and skillfully avoid potential conflicts. My examples suggest that community members seek for socioculturally meaningful ways to avoid conflicts, even as they struggle with power relations and emotions such as jealousy and envy. Thus, gasshuukoku is a community whose members make moment-to-moment efforts to forge social relationships.

研究分野：言語学

キーワード：相互行為 言語人類学 石垣島

1. 研究開始当初の背景

(1) 今回の研究助成が始まる前から、研究代表者は、2009-2010年度の科学研究費補助金若手研究(スタートアップ)の研究課題『石垣島の相互行為の言語人類学的分析: 言語・ジェスチャー・環境の接点を探る』(課題番号 21820053)において、石垣島で空間を表現する際の言語・ジェスチャー使用の分析に取り組んできていた。これとは別の研究においても、ユニークな敬語使用(話者自身の行為に敬語を使う、親しい友人同士が連続して敬語を使うなどの例)に着目し、相互行為をダイナミックにする過程を分析し、それを言語イデオロギーやアイデンティティとの関連からも議論してきていた。今回助成を受けた研究では、石垣島の地域社会での詳細なエスノグラフィーをもとに上記の2つの研究の融合と発展を試みたものである。

(2) 言語人類学研究では、様々な言語を対象に相互行為における言語・ジェスチャー使用の分析からの考察が進められてきた(菅原 1998, 2004; Enfield 2004, 2007; Hanks 2005; Nonaka 2007 他多数)。日本語の相互行為を言語・ジェスチャーの面から分析した研究も非常に多いが、そのほとんどは標準語をデータにしていた(Kataoka 1998; 齊藤&喜多 2002; Hayashi et al. 2002; 坊農&片桐 2005 他多数)。生活環境とのかかわりや参与者間の人間関係を含めて言語人類学的なフィールドワークを出発点に分析したものは少なかった。同じ生活世界に生きる人間同士がどのようにして相互関係を構築しているのか、言語・ジェスチャーの使用と生活環境がどのようにつながっているのかを明らかにしたいと、石垣島でのエスノグラフィーに基づく本研究を開始した。

2. 研究の目的

(1) 助成を受けた本研究では、石垣島の話者が相互行為の中で言語・ジェスチャーをどのように使うのか、それは環境や地域の慣習に何らかの影響を受けているのか、そこからどのような社会や人間関係が構築されているのかを明らかにすることを目的とした。

(2) 世代や参与者関係の異なる地点で集めたデータをもとに、当初は以下3点を明らかにしようと試みた。第1に、石垣島出身話者と観光客との相互行為では石垣島出身話者同士と比べて何か違いがあるのか、石垣島出身話者の間でも世代により違いが見られるのかである。石垣島の話者の多くが共有するメタ言語的コメント(特に方言と敬語の使用の関係について)を分析し、それが地域の環境や参与者同士の人間関係とどのように交わるのかを明らかにしようと予定していた。第2に、相互行為で参与者が互いの言語形式に合わせる必要がある場合、ジェスチャーや視線、姿勢にも同様の傾向が見られるのか、

それは社会環境に起因しているのかを明らかにすることだった。第3に、石垣島話者が空間を表すときの言語やジェスチャー使用を細かく分析し、参与者の位置関係が影響を与えているかどうか、同一人物でも状況(話者の性別・年齢・出身地、聞き手の出身や知識)によっては空間指示棒の使用が異なるのか、どうして間主観的になりうるのかを探ることであった。

3. 研究の方法

(1) 石垣島に毎年数回フィールドワークに赴き、そこで島の人々や移住者の人々の間、あるいは彼ら同士の相互行為をビデオに収録した。また、話者がそれぞれの行動に対して持つメタコミュニケーションについてインタビューを行い、言語やジェスチャーの使用やメタ的なコメントをもとに実証的に分析する方法をとった。

(2) データ収集地点は地域環境や人間関係、文化的習慣がつぶさに見られる地点(果物生産農家の自宅兼売店、その他のサービス場、観光協会、豊年祭など)であった。分析と議論の焦点は、相互行為の中で“attunement”現象または異なる現象が言語あるいはジェスチャーに見られるか、人間関係の構図、方言や敬語の使用と言語にまつわる考え方や価値観、言語・ジェスチャーの使用と地形や慣習とのかかわり、であった。

4. 研究成果

研究成果は大きく2つに分けられる。

(1) まず、石垣島で空間を表現する際の言語・ジェスチャー使用の分析に取り組み、それが生活環境や地域慣習と結びついていると同時に、相互行為の「今・ここ」における相手の視点を中心とする間主観的な言語実践であることを論じた点である。つまり、個々人に帰属するという前提で議論されてきた空間認知が、相互行為の「今・ここ」に基づく社会関係の中で創造的に生み出されることを示したことになる。これまでの研究では、ある言語が好むタイプの空間指示棒があるという前提にもとづいていたが、空間指示棒の選択には相互行為の相手関わっていることを実証した。

さらに、空間への言及指示や状況説明にとどまらず、ときに地域への帰属を示すグループ標識として、またときに地域の習慣や地理に長けているかどうかといった共同体への溶け込み具合やそこでのアイデンティティ標識として機能していることを論じて、学会発表や論文としてまとめた。

(2) 次に、島出身者でも移住者でもない研究代表者が石垣島に赴くたびに、生活世界に入り込む難しさや距離感を味わったことをきっかけに、多様な人々が入り混じり『合衆国』

と呼ばれる石垣島社会に暮らす移住者と島の人々との社会関係に注目したことに端を発した一連の成果がある。そこでは、“discordance” (不一致・不調和) というメタ概念を新たに提示しながら、相互行為データに基づいた社会関係のありさまを人類学的見地から論じていった。具体的に述べると、石垣島社会が、島出身者や他県からの移住者、台湾からの帰化者から成り、『合衆国』と呼ばれる点に着目し、「理想的な共存社会」に暮らす人々の言語実践に潜むすれ違いや不一致を調査した。島出身者と移住者の相互行為を分析すると、一見、それは友好的な関係にも見えるが、島民と移住者の社会関係にも隔たりがないとは言えない。もっと言えば、島出身者とそれ以外の者、沖縄県出身者と他県からの移住者、さらに移住者間で、島生活の長さ、ネイティブ度の違い、島生活全般への知識、専門知識や技能の有無に応じて、常にあちこちにおいて微妙な力関係があることが分かった。

(3) discordance 現象は相互行為で偶然起きた出来事のように見えて、実は社会文化史的な軸から考えると言語使用を通じて作られ、繰り返され、イデオロギー的特徴を持って現代社会の文化的実践を統制している度合いが高い。相互行為の参加者が瞬時にコンテキストを把握しながら人間関係やアイデンティティを創造していく過程で、歴史性や社会実践とも段階的にまた多層的に重なり合う動的な記号作用の一環としての現象と考えられる(cf. Carr & Lempert 2016)。

(4) 研究成果全体をまとめると、今回の研究課題では、後者が主なものといえよう。『合衆国』とも呼ばれる石垣島の構成員は、相互行為の「今・ここ」で瞬時に変化する力関係や嫉妬、羨望を含む心的感情に対処しながら、少なくとも表面上は友好的な関係を構築しようとしていた。このことを、discordance (不調和・不一致) の概念を提示しながら論じてきた。第 14 回国際語用論学会では、この“discordance” というメタ概念を提唱し、これにまつわるパネルを企画した。

また、「暗に示され、漠然とした、ゆえに見逃されかねない不調和・不一致」というメタレベルでの分析概念である discordance をもとに、日本語用論学会、国際語用論学会、日本英語学会、社会言語学シンポジウム、Japanese/Korean Linguistics Conference でもパネルやシンポジウム、個人発表を企画実行し、研究成果を発表していった。

研究助成最終年度の後半には、discordance がかわる編著書出版に向けて、編著者として執筆者とのやりとりや取りまとめ、本のイントロや論文執筆を開始した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

Makiko Takekuro. “Describing space as an intersubjective activity: Examples from Ishigaki.” 2017. In Harada Yasunari, Sachiko Shudo, and Makiko Takekuro (eds.), *Papers On and Around the Linguistics of BA*, pp.33-43. 早稲田大学情報教育研究所、査読なし

榎本剛士、武黒麻紀子、柳町智治、高梨克也「メタコミュニケーション 社会言語科学における共通基盤を求めて」2016. 『社会言語科学』第 19 巻第 1 号 1-5. 査読なし

武黒麻紀子「『合衆国』な石垣島での相互行為と社会関係」2014. 『日本語用論学会 第 16 回大会発表論文集』第 9 号, 341-344. 査読なし

Makiko Takekuro. “Compass-based use of language and gesture among speakers of Ishigaki.” 2013. In Thera Crane et al. (eds.), *Proceedings of the Thirty-Third Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp.412-423. Berkeley: Berkeley Linguistics Society. 査読有

Makiko Takekuro. “From *keigo* (‘honorifics’) to *keii-hyogen* (‘respect expressions’): Linguistic ideologies of Japanese honorification.” 2012. In Zhenya Antić et al. (eds.), *Proceedings of the Thirty-Second Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp.401-413. Berkeley: Berkeley Linguistics Society. 査読有

[学会発表](計9件)

Makiko Takekuro. “Rituals and communication on Ishigaki Island: Discordance over traditions.” 2016 年 12 月 16 日. The Fourth International Workshop on Linguistics of BA, 早稲田大学(東京都新宿区)

Makiko Takekuro. “Discordance in interaction: Rethinking the *gasshuukoku* (‘united states’) metaphor on Ishigaki Island.” 2016 年 10 月 15 日. The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference, 国立国語研究所(東京都立川市)

武黒麻紀子。「Discordance (不調和・不一致) が示すもの、その先にあるもの」2016 年 9 月. 第 38 回社会言語科学会研究大会, 京都外国語大学(京都府京都市)

Makiko Takekuro. "Bonded but un-bonded: What meta-communicative comments reveal about interaction." 2016年6月23日. Sociolinguistics Symposium 21, Universidad de Murcia. (スペイン、ムルシア)

武黒麻紀子. 「不調和の多層的展開」2015年11月21日. 日本英語学会第33回大会、関西外国語大学(大阪府枚方市)

Makiko Takekuro. "Managing discordance in a small island community: Examples from Ishigaki." 2015年7月30日. The 14th International Pragmatics Conference, University of Antwerp. (ベルギー、アントワープ)

武黒麻紀子. 「『合衆国』な石垣島での相互行為と社会関係」2013年12月7日. 日本語用論学会第16回年次大会、慶應義塾大学(東京都港区)

武黒麻紀子. 「言語・インターアクション・文化: 石垣島の事例から」2012年11月10日. 日本英語学会第30回大会、慶應義塾大学(東京都港区)

Makiko Takekuro. "Interactional effects of self-respectful forms in Japanese." 2012年10月13日. The 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference, 国立国語研究所(東京都立川市)

〔その他〕

学術論文編集

Harada Yasunari, Sachiko Shudo, and Makiko Takekuro (eds.), *Papers On and Around the Linguistics of BA*. 早稲田大学情報教育研究所

<http://www.decode.waseda.ac.jp/lob/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武黒 麻紀子 (TAKEKURO, Makiko)

早稲田大学・法学学術院・准教授

研究者番号: 80434223